

# 浪華十詠和歌色紙が臨春閣の欄間にあしらわれているのはなぜ？

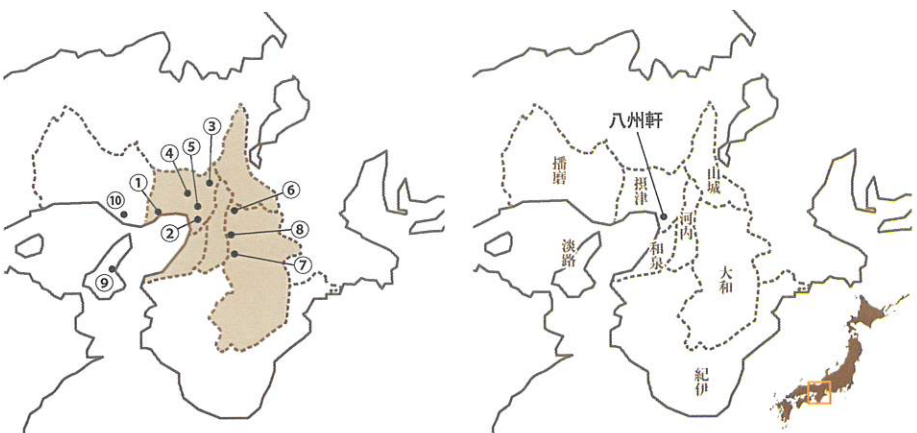
臨春閣の前身「八州軒」は大阪にあった

このことを紐解く鍵は、臨春閣が三溪園に移築される前にあった場所にあります。臨春閣は原三溪が大阪から移築してきたもので、もとは「八州軒」と呼ばれていました。名前の由来は、淡路・紀伊・大和・河内・和泉・播磨・山城及び摂津の八州（八国）の風景が一望できたためといえます<sup>〔註1〕</sup>。

八州軒があったのは「春日出新田」と呼ばれる場所。もとは「四貫島浦」と呼ばれた葦原でしたが、江戸時代の十七世紀末頃から新田開発が行われた地域です。開発以来幕府領だった土地に享保十五年（一七三〇）和泉国日根郡佐野村〔現在の泉佐野市〕の豪商・食家が造った会所が八州軒でした。特に関わりが深かった紀州徳川家から拝領した数寄屋風の建造物をここに移築したといえます。

八州軒があった場所（現在の此花区春日出南二丁目三 春日出公園内）を地図に落とし込んでみると、浪華十詠で歌われた十箇所の名所の中心に位置することがわかります。

未だ推測の域を出るものではありませんが、なんらかの経緯で浪華十詠の和歌帖を手に入れた食家が、八州軒の装飾としてふさわしいと考え、欄間の装飾に転用したのではないかととも考えられます<sup>〔註2〕</sup>。



- ① 須磨
- ② 住吉
- ③ 田蓑島
- ④ 難波
- ⑤ 天王寺
- ⑥ 生駒山
- ⑦ 葛城山
- ⑧ 二上山
- ⑨ 淡路
- ⑩ 明石

註1 当時、建物の周りは新しく開墾された田んぼが広がり、二階建ての八州軒が目立つたのでしよう。実際に八州を望めたのではなく、八州が望めるほどの高さがあったのだでしょう。実際には八州を望めたのではなく、八州が望めるほどの高さがあったのだでしょう。

註2 建築史研究においては、紀州徳川家が八州軒の前身建物を所有していた時代から、浪華十詠和歌色紙が欄間にあしらわれていたとする見解もあります。

## 「八州軒」の所有者・食家

一流の公卿たちの手になる和歌帖を二介の商人が入手できるのか？訝しく思われる方もいらっしゃるかもしれません。

食家は江戸時代中期に最も栄えた豪商で、廻船業や大名貸しなどで巨財を築きました。江戸時代中期の宝暦十一年（一七六一）には鴻池、三井など名だたる豪商と並んで同額の御用金を幕府に用立てていました。大名貸しでは和泉国を領有していた岸和田藩はもちろん、全国の名主に資金を貸し付けていました。食家の当時の発展ぶりは「加賀の銭屋か和泉のメシカ」といわれるほど。その財力は十分であったことがうかがえます。